



優秀賞

東京都小金井市立緑中学校 3年

箱 井 真 理

私がオリンピック・パラリンピックに期待すること

オリンピックの開催地が東京に決まって以来、オリンピックに向けての準備が着々と進められてゆくのを肌身に感じてきた。中でも高校生だった兄に、東京都ボランティアの募集の案内や、そのトレーニング研修会の案内が送られてきたことには、受け入れ側としての自覚を促されたような気分になった。ただ、その研修会の内容には、少しもの足りなさを感じてしまったのだが。と言うのも、そのボランティアは、「May I help you?」というバッチが配られたことからわかるように、英語で外国人をおもてなしすることに主眼をおいたものだったからだ。確かに英語は公用語で汎用性が高いと思うが、オリンピックや、ましてやパラリンピックでのおもてなしには、手話や点字、さらには障がいに応じた接し方なども知っておく必要があるのではないかと思うのだ。もしも私が知らないだけで、そういう研修も用意されていたのなら申し訳ないが、実際私の耳には入ってこなかった。どうせならこの機会だからこそ、普段手うすになっている障がいのある方とのコミュニケーションのとり方を積極的に教えてもらいたかったと、私は思う。少なくとも関心を喚起して欲しかった。

また、開催の準備を進める上で、障がいのある方たちの意見は汲み上げられたのだろうかということも気になった。実際に困っていることや要望を聞き取るよい機会だったと思うからだ。そしてそれは、街や公共交通機関の整備に活かすことができるはずだ。駅や街中に英語や中国語、ハングルの案内が増えるのと同じ位、点字ブロックが普及したり、段差をなくしたりといったバリアフリーが広がったらよいのと思う。さらにそこで生活する個々人が、路上に障害となる物を置いたら危ないなどということに気が回るようになれば、もっともっとバリアフリーは浸透してゆくはずだ。これらのことは、開催が一年延びたことで、まだこれからに期待できるかも知れない。

おもてなしに一番大切なのは「心」であることは、言うまでもない。視覚障がいの方たちのサッカー（ブラインドサッカー）チームが日本に事前合宿に来ている様子を事前番組で紹介していたが、彼らを受け入れている自治体の小学生が、歓迎をする場面が素敵だった。小学生たちが自分たちでできることを一生懸命考えた結果、太鼓と踊りを披露することにしたのだが、その一方で目の不自由な方々に対して、その歓迎の仕方は正解なのかと悩んでもいた。しかし実際には、チームの方々は太鼓のリズムに体を乗せ、とても喜んでくださった。見えないものでも心は十分に伝わるのだと、私も嬉しくなったし、自分も何かできたらいいなという気持ちになれた。こういう気持ちになる機会をくれることも、オリンピック・パラリンピックの魅力だと思う。オリンピック・パラリンピックは、人の頑張りや温かい交わりを見せてくれるから大きな感動をくれる。感動からは共感する気持ちや賛同する気持ちが生まれ、「私も……」というプラスのエネルギーが湧きあがる。その大きなプラスのエネルギーに乗じて、その後の社会が良い方向に活性化されること、例えば異文化に対する理解が深まったり、バリアフリーが根づいたりということがあっていいのではないかと私は思っている。私がオリンピック・パラリンピックに期待するのは、まさにこういうことなのである。